

# 婦人畫報

東京：近事畫報社，1905—



創刊号（1905年7月）の表紙 石川寅治画

本誌は、国木田独歩によって、日本が日露戦争に勝利した時代に女性の文化向上の目的で創刊された。創刊号で独歩は次のように記している。「此雑誌は此時勢に促されて生まれたるなり。即ち時勢の要求に応じたるなり」。また、「女界の活動、教育、好尚、流行等の事実を画報し得て、更に善美なる傾向を助長」とある。内容は、絵画、女子学生や皇族・貴族の写真、社会・家庭・教育・料理・手芸・趣味・服飾・流行・文芸欄など広い分野に及ぶ。

出版社は1906年近事畫報社から獨歩社に変更。さらに翌年東京社に改名される。近年では1999年、婦人画報社からアシェット婦人画報社となる。本誌のタイトルは1907—1909年「東洋婦人畫報」に改題されたが、同年には「婦人畫報」に戻る。そして、1944年の一時期「戦時女性」と改題されたが、1945年再び「婦人画報」に復題された。

1909年12月号—1948年5月号は、本館では数冊のみ所蔵。国会図書館には一部欠号がみられるものの多く所蔵されている。創刊号から戦前の終刊号までの原本500冊が、明治・大正期、昭和期の2回に分けて、表紙はもとより、広告ページ・奥付まですべてデジタル画像のDVD8枚に収録され、臨川書店から販売されている（本館所蔵）。各時代の広告の変遷から世相を見ることもできる。貴重な資料の酸化を気にして、誌面のページをめくるのにも神経を使ったこれまでと比べ、デジタル画像はその心配はいらない。

1903年に創刊され現在も継続する「婦人友」と同じ時期の創刊で、2005年には創刊100年目を迎える。2003年7月号の創刊1200号記念企画では、明治・大正・昭和・平成の表紙を振り返るとともに、日本女性の美の変遷をたどっている。

創刊時の明治末期、皇族・貴族などの上流社会の令夫人や令嬢の洋装が、毎号のグラビアを飾っている。また当時、女子学生の授業風景の写真が多く、学校名一覧および教授案内の特集号（1908年10月号）もあり、女子教育の高揚という編集意図が読み取れる。裁縫を学ぶ女子学生の姿が頻繁に登場することから、裁縫教育が当時の女子教育の重要科目であったことがうかがえる。なかには

シンガーミシン裁縫女学院で和服姿の女学生がミシンを踏む授業風景（1909年6月号）や、生徒による子供服の作品展（1908年8月号）が掲載され、洋裁教育および洋装着用状況を知る貴重な資料となっている。

明治末期になると、女兒用「改良服」（1908年5月号、7月号）の裁断図、「よだれかけ」（1909年5月号）、「改良仕事着」（割烹着）（1909年6月号）などが登場し、このころから家庭裁縫のための製図の掲載が始まったようである。

第二次世界大戦後の洋裁ブーム期にはデザイン画が豊富に掲載され、原型を用いた製図も数多くみられる。これらのコーナーでは、伊東孝、伊藤すま子、中原淳一、田中千代、桑沢洋子、伊東茂平らがデザイン画や製図を載せ、読者の洋服作りの一助を担っている。

しかし、1975年以降、製図のページが減少することから、既製の普及とともに次第に洋裁が読者の興味の対象ではなくなってきたことが読み取れる。

猪熊弦一郎、藤田嗣治、佐野繁次郎、三岸節子、高島達四郎、鈴木信太郎、芹沢銈介、荻須高德、東郷青児など、「画壇の最高峰が描いた表紙は、暮らしと芸術の掛け橋だった」と、創刊1200号記念企画で表現しているように、様々なタッチの表紙画を見ていると、さながら明治・大正・昭和期に活躍した画家たちの作品を展示した美術館に足を運んでいるようで、贅沢な気持ちにさせられる。1957年5月号からは、時代を代表する女優やファッションモデルたちの写真が表紙を飾るようになり、誌面でも彼女たちの装いと行動が、ライフスタイルのモデルとして読者に提示されている。

1960年代以降、世界で活躍しはじめる日本人デザイナーによる誌上ファッションショーは、あたかもファッション雑誌のようで華やかさが伝わる。読者が着てみたいと思うより、むしろファッションの多彩さを見て楽しむ企画である。

現在もファッションは同誌の大きな柱の一つだが、経済的にゆとりのある大人の世代に向けた生活総合誌へと転身している。美意識をも刺激するクオリティの高いきもの、生け花、茶、伝統工芸、懐石料理といった伝統的なものを守り伝えるページは定評がある。また、インテリア、旅などの紹介にも力を入れている。さらに、1999年にアセット婦人画報社刊となってからは、海外情報が一段と増え、よりグローバルな視点でとらえた文化的で洗練された暮らしの一端が誌面で展開されている。

（藤田恵子）